

琵琶湖におけるチャネルキャットフィッシュの分布拡大予測に向けた取り組み

吉田 誠（国立環境研究所 琵琶湖分室）

近年、琵琶湖・淀川水系への特定外来生物チャネルキャットフィッシュ *Ictalurus punctatus*（アメリカナマズ）の侵入が確認され、琵琶湖下流の瀬田川および琵琶湖南湖では繰り返し、捕獲が確認されている（片野ほか 2010）。本種は北米を原産とする雑食性の大型淡水魚で、国内では現在、霞ヶ浦・利根川をはじめとする 8 つの水系に分布する（吉田 2017）。

原産国ならびに霞ヶ浦での研究報告から、本種は浅く、水温のやや高い水域を好むと考えられており、琵琶湖内ではおもに南湖が生息に適した環境と推測される。いっぽう北湖では、水深が深く（平均 40m、最大 104m）、水温躍層下に低温の水が周年みられることから、本種の侵入は、浅く水温の高い岸伝いに進行し、かなりの時間がかかると予想された。しかし、2016 年に北湖の南端部で本種が複数捕獲され、うち 2 個体の捕獲場所がやや沖合寄りであった（滋賀水試 2017）ことから、本種が沖合を遊泳して北湖全域へと急速に分布を拡大する可能性が懸念される。

琵琶湖における本種の分布については、おもに漁業者からの情報提供にもとづき把握されてきたが、潜在的にはより多く、広範囲での捕獲情報があると想定される。また、外来魚対策にはきめ細かいモニタリングと、分布拡大の早期検出が最重要課題となるが、広大な琵琶湖の全域にモニタリング努力を投入し続けるのは困難であり、適切な分布拡大予測と、それに応じたモニタリングの仕組みが必要となる。

本発表では、上記 2 つの課題を解決するために現在進めている、公益財団法人自然保護助成基金第 29 期（2018 年度）プロ・ナトゥーラ・ファンド助成プロジェクトの取り組みについて紹介する。

具体的には、①琵琶湖全周を対象とした網羅的な捕獲情報の収集とマッピング、および②本種の行動特性（遊泳能力）に基づく分布拡大シナリオの予測、の 2 点に関して、ポスターやチラシ【図】を用いた情報の周知と聞き取り調査、水産試験場・漁協・博物館といった関連機関との連携・情報共有について話題提供するほか、動物装着型の行動記録計を用いたバイオリギング研究で明らかとなりつつある本種の野外での生態について、研究結果を交えて報告する。

あなたが釣った魚、



アメリカナマズの幼魚



アメリカナマズの成魚

ひょっとしてアメリカナマズ?

正式名：チャネルキャットフィッシュ

最近、琵琶湖で外来魚アメリカナマズが見つかっています。
アメリカナマズかもしれない魚を捕獲した際は、ぜひご連絡ください。

電話：077-599-4848 メール：biwako-sakana@nies.go.jp

吉田誠 (国立環境研究所琵琶湖分室)



ご協力のおねがい

「魚の写真」を添えて、「いつ・どこで・どんな仕掛けで釣れたのか」の情報を
お送りください。お名前、ご連絡先もあわせてお知らせください。年齢や食性
も調べているため、可能であれば魚体の回収にもご協力お願いします。

アメリカナマズの見分け方 illustrated by Natsumaru Abe



このポスターは、公益財団法人自然保護助成基金第29期(2018年度)プロ・ナトゥーラ・ファンド助成によって作成されました。



【図】 チャネルキャットフィッシュの情報提供を呼びかけるポスター